

淨土

1989-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三十五号
平成元年六月二十五日印刷 平成元年七月一日発行

第五十五卷

七月号



七月の秀句

夕月に七月の蝶のぼりけり

原 石 鼎

紅さして寝冷の顔をつくろひぬ

高 浜 虚 子

激情を日焼の顔の皺に見し

星 野 立 子



||| 七 月 号 |||



よく娑婆国土の五濁悪世の、劫濁、
見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中に
おいて阿耨多羅三藐三菩提を得。

——『阿弥陀経』

===== 目 次 =====

—— 法 話 ——

盆施餓鬼を迎えて(一).....川 村 悠 穂.....(2)

念仏は延年長寿の行.....村 瀬 秀 雄.....(8)

三人の比丘尼安居 香 山.....(16)
——妙好人の死——

童話の世界 [N]

音(その四)——「ホカホカホカってなんの音」…ぬのむらてつや.....(24)

《四 行 詩》

鷺 草.....清 川 宗 治.....(22)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <28>

海と山の狭間で木 下 隆 一(29)
——我が思い出に住む犬たち(14)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(7)松 浦 行 真.....(35)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

法 話

盆 施 餓 鬼 会 を 迎 え て (一)

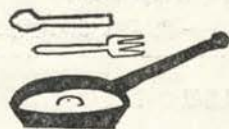
川 村 悠 穂

(静岡市西福寺住職)

お盆を迎えると大施餓鬼会を同時にこなう所が多いのですが、そのころは、云うまいと思えど今日の暑さかなであります。

そこで、四月末頃から五月の氣候の良い時におこなうところがあります。

お盆は、インドでは雨季明けの旧暦七月十五日の目連尊者の親孝行の教えから始まったのであり、お施餓鬼は、阿難尊者の延命転寿の祈願に由来するので、いつおこなってもよいのであります。しかし長年の習慣でお施餓鬼は、暑い時やらなければ、やったような気がしないと、春と夏の二度やるお寺もあるようです。



お釈迦さまの長老十哲の一人で多聞第一と呼ばれた、阿難尊者という方がありました。この方は、釈尊の叔父（甘露飯王）の子で、釈尊の従弟という方であって、釈尊が出家された年（二十九歳）に生まれて、成等正覚即ち、お悟りをえた年（三十五歳）から四、五年の後（三十九・四十歳）即ち、阿難尊者が十歳前後になった時、お釈迦さまのお弟子となられたのであります。

釈尊お涅槃の後、なお二十八、九年在世して、釈尊と同じく八十歳位の時マカダ国とベイシャリ国の国王及び信徒の引っぱり鳳となって、ついに両国の境界をなしているガンジス河の真中に船を浮かべて入滅されたということです。

阿難尊者は容貌も気質も極めて柔和で同情心も深く、かつ、記憶力の強いことに於いて、仏弟子随一という方で、釈尊がお亡くなりになる前、お側を離れなかったことを二十余年間ということでしたから、釈尊のご説法は悉く聴聞しているので、多聞第一と称され、従ってご入滅後、この方の記憶を中心として五百人の長老が集まって、お経文を結集編纂されたのであります。この阿難尊者が未だ青年時代、修業最中のことであります。ある時一人で森の中で坐禅修業をしておられました。すると、突然一人の外道バラモンが現われて、阿難に申しますには、

「まことに気の毒だが、君には死相がでている。折角、偉い聖者になるつもりで、仏道修業に精進してみえるが、確かに君の命は三日の中に尽きてしまふに相違ない」といわれて、阿難尊者は未だ修業中の身であり、温順の方でありますから、気も転倒

せんばかりに驚き悲しまれました。

生まれ難い人界に生まれ、遇い難い仏にお会いすることが出来、あまつさえ、お弟子となりながら、未だ悟りも得られないうちに死するとは、何と悲しいことであろうと、死の苦しみに直面されたのであります。そこで泣く泣く釈尊の御前に出て、これを訴え、ひたすらにその救いを願われたのであります。

釈尊はこれを聞かれて、阿難の心を憐れみ、おもむろに教え給うたのであります。

「阿難よ、人の寿命は総べて各自の宿業の定まる所で、仏の力と雖もこれを自由に変更することはできないのである。ただ大因縁によりて、自ら新しき生命を作り出す外はない。それには、良い方便を教えてあげよう、先ず大慈悲心をおこして、三界に充満せる有縁・無縁一切の餓鬼に浄飯食を施して、彼等が不断の苦患を救うて遣るがよい。その大功徳力によってこそ、お前に新しい生命が与えられ、延命転寿（長生き）の結果も現われることであろう」

と、即ち大施餓鬼会の修法を懇ろに教えられたのであります。

阿難はここに愁眉を開いて希望の喜びに燃え、早速大衆を請じて大施餓鬼を修し、ついに三日にせまれる寿命を転じて八十歳に近い長命を得て、自分が悟りを得たばかりでなく、さきほど申した如く、マカダ国やベイシャリ国から、崇拜的となり、引つ張り風となったほどであり、これが施餓鬼法要の始まった因縁であります。

ところが、お盆は目連尊者の因縁が糸口で、餓鬼道におちている母親を救わんが為

に七世の父母の報恩の為に諸仏聖者を供養する先祖供養であり、お施餓鬼は自分の命を創造する為に飢餓の衆生を救済しようとする社会的行事と見てよいのであります。共に有縁・無縁一切の餓鬼を救済する慈善行でありますから、自然に盆施餓鬼というような慣例がつけられたものと思われまます。

これらのことは、どういふことを私達に教えて下さっているものでありましょうか。

この慈善行ということは、私達は、目に見えるもの見えないものから、生かされ生きていくことでありますから、私以外の命が生きてこそ、私達も生かされるのであります。

極楽の華は、蓮の華といはれております。蓮の華は夏に咲きます。それでありまから、暑い所かとおもうのでありますが、無量寿経には、「清風時に起りて五音の声を出す、微妙の宮商自然に相和す」とあり、また阿弥陀経には、「かの仏の国土には、微風ふきて、諸々の宝行樹および宝羅網を動かして微妙の音を出せり」とか、「その国の衆生、もろもろの苦あることなく、ただ諸の楽しみを受く、かるが故に極楽と名づく」とあります。

それでありますから、極楽というところは、非常に結構な所のようにあります。私、まだいったことないので、見てきたようなことはいえませんが、そのような国があれば行ってみたいとおもいます。またお釈迦さまも、宗祖法然上人もお教え下さっておりますし、私も、そのような国に生まれて行かれることを願っておりますし、必ず仏

さまによつて生まれさせて頂けると信じさせて頂いているわけでありませう。

今、日本は世界の人から羨ましがられている程、経済大国だといわれております。しかしお金はある所にはあるのですが、ない所はないで、私達ももつとお金があれば、孫たちの進学する費用を心配しないで済むのになーと、おもうのであります。

去る四月十一日、川崎市の竹藪の中に一億数千万円が捨てられてあったというので、びっくりしたら、また九〇〇〇万円のお金が出てきたというので、大騒ぎになりました。この原稿を書いている時点（五月十日）では、お金の持ち主が分かりましたが、竹藪のお金は捨てたのではなく、そこにしまつておいたということです。何故そんな所にしまつておいたのでしょうか。お金があつても無くても苦労することとは、所詮この世は、苦婆婆の世の中です。

私は、毎月刑務所や少年院に話にしています。去る三月十五日、少年院で話をして、その感想文を書いて貰いました。そうしたら、その中に、

「僕の考えていた、苦労というのは、おまわりさんからにげるのに苦労したとか、バイクを盗むのに苦労したとかにそういうことだと思っていました。ほしいものがあれば、盗めばいいという考えでした」

という感想文がありました。学校教育はどうなっているの、と、いいたくありません。いや、少年院の院長先生は、「家庭教育がなっていないからですよ」とおっしゃっていました。

苦勞するといふのにも、いろいろありますが、やはり、この世は苦婆娑の世界です。婆娑といふのは、堪え忍ぶということであり、即ち、苦しみを堪え忍ぶということであり、けつして楽な世界ではないのであります。

私達の世界は、常に四苦八苦の苦しみを受けていると仏教ではいつております。すなわち、

- 1 生苦………生きる苦しみ。
- 2 老苦………歳をとる苦しみ。
- 3 病苦………病いの苦しみ。
- 4 死苦………死の苦しみ。
- 5 愛別離苦……愛するものとの別かれる苦しみ。
- 6 怨憎会苦……にくしみあつていても、因縁がなければ離れられない苦。
- 7 求不得苦……求めても得られない苦。
- 8 五陰盛苦……体と心の苦しみ。

このような世界で、明るく正しく仲良く生きぬいて行くにはどうしたらよいか。そして、極楽の世界のような、もろもろの苦しみあることなく、ただ諸々の楽しみのみを受く世界に行くには、どうしたらよいか、それを教えて下さったのが仏の教えであります。

(つづく)

念仏は延年長寿の行



毎日を安穩に暮し、息災であつて天寿を全うできるとすれば、これ以上の幸せがない。ところが念仏を唱えていれば、誰でもこうした願望を達することができ。念仏の功德については経典のあちこちに説かれ、かつ讃歎されているが、次の一句はその結論のように

思われる。

「喜び勇んで乃至一念すれば、その者は大きな利益が得られ、最高の功德を具えることができる」

ここで乃至一念というのは念仏の数を問わないのであつて、たとえ一声の念仏を唱えた

村瀬秀雄
むら せ ひで お

者でも利益と功德が得られるのである。法然上人は次のように説いている。

「一遍の念仏を唱えれば無上の功德があると
いうのであるから、十念を唱えれば十の無上
功德があり、百念を唱えれば百の無上功德が
あり、千念を唱えれば千の無上功德があるこ
とになる。このように念仏の数を次第に多く
して唱えれば、無上功德もますます多くな
ることになる。念仏を日夜に励んで唱えて
相續してゆけば、はかり知ることができない
無量の功德が具足されることになる」

無上の功德については、それぞれの面から
幾つも説かれているが、ここでは二つの功德
を挙げることにする。一つには仏の先明の撰
取を蒙ることであり、二つには諸仏の護念が
得られることである。初めに光明撰取という

のは、阿弥陀仏は無量の光明を放って十方の
世界をあまねく照らし、念仏を唱える者を撰
取して捨て給わぬことである。撰取というの
は、仏が念仏を唱える者を選んで収めとり給
うということである。しかし仏はどのようにし
て収めとり給うのかと思つてみると、いま
一つ明確さを欠くものがある。そこで証賢は
次のように述べている。

「徳大寺に唯蓮房という僧がいて、仏の光明
はどのようにして念仏の行者を収めとり給う
のであろうかと考えてみたが、よく納得する
ことができなかった。そこで雲居寺に七日間
の参籠をして、そのわけを知るために祈請を
こめた。すると請願の日の夜に夢をみた。本
尊の阿弥陀仏が御手を差し伸べて唯蓮房の腕
をとり給い、しばらくしてから『収めとつて

捨てないというのは、このようなことである』との給うのを聞いて目を覚ましたという。この話を聞いて成程と心得ることができた。阿

弥陀仏は光明という御手を差し伸べて念仏の行者を抱きかかえ、そのまま離し給わぬということが攝取不捨ということであつたのである。この話によつても仏の深い慈悲がわれ等に十分及んでいることを、つくづく思わないわけにゆかない。仏は遙かに遠い極楽浄土にあつて光明を放ち、われ等をその光明の中に閉じこめて束の間も手放し給うことがないのである」

念仏を唱えていれば仏の光明の中に籠つて暮してゆけるのであるから、毎日を清浄にして安穩な生活を過すことができるのである。何故ならば仏の光明の功德によつて大きな利

益を受けることができるからである。法然上人は次のように説いている。

「阿弥陀仏を清浄光仏とも申し上げる。そのわけはたとえ貪欲が深くて不姪戒と不慳貪戒を保つことができない人であっても、心から専ら念仏を唱えていれば、阿弥陀仏は無貪清浄の光明を放つて収めとり給うからである。その者は仏の光明に照らされて姪貪と財貪という不浄が除かれ、持戒清浄の人と同じことになる」

貪りは苦悩の根本の原因とされているが、中でも不姪戒は一切の邪淫を禁ずることである。不慳貪戒は物惜しみしないで、教えや財物を惜しまずに施すことである。この両戒はともに最も重い禁戒の十重禁戒の中に数えられている。仏の光明に浴すれば貪りが除かれて、

われ等の苦悩の原因がなくなる。次いで上人は次のように説いている。

「阿弥陀仏を歓喜光仏とも申し上げる。そのわけはたとえ怒りの心が多い者があっても、専ら念仏を唱えていれば、仏は歓喜光を放って収めとり給うからである。その者は光明に照らされて怒りの罪が減せられ、忍耐の人と同じことになる」

怒って相手を怨むことは他人に害を与えるばかりでなく、己れ自身を苦悩の淵に追いやることになる。もし耐え忍ぶことができれば大方の紛争がなくなり、自らも心が安らかにして静かな日々を送ることができる。更に上人は次のように説いている。

「阿弥陀仏を知慧光仏とも申し上げる。そのわけはたとえ無知な者であつても専ら念仏を

唱えていれば、仏は知慧光を放って収めとり給うからである。その者は光明に照らされて愚痴の罪がいかに多くとも減せられ、智者と異なることがないようになる」

愚痴は道理を知ろうとしない愚かさのことであり、智者は学問を積んだ賢者のことである。念仏を唱えて仏の光明に浴すれば貪り、怒り、愚かさという煩惱が起す罪をすべて滅せられるのであるから、自然と安穩に暮してゆくことができる。善導大師は一声の念仏によつても一切の煩惱の罪が減せられるのは、恰も利剣が鋭く物を断ちきるのに似ているとして、次のように述べている。

「利剣は即ちこれ弥陀の号なり。一声称念すれば罪をみな除く」

次には念仏を唱えていれば諸仏の護念を蒙

るということである。經典には次のように説いている。

「阿弥陀仏の名号と阿弥陀経が一切の諸仏から称讃されていることを聞いて念仏を唱えるならば、これ等の人は無数の仏たちによって護念されるのである」

諸仏から護念されるということは、諸仏が念仏を唱えている者を護り給うということである。善導大師は次のように説いている。

「諸仏の護念を蒙るといふのは、諸仏が念仏を唱えている者を心にかけて護り給うということである。念仏を唱える者に惡鬼邪神が近寄ることがないように、また惡道に誘引されることがないように、諸仏は常に行者を護り給うているのである。そのために行者は仏に助けられて思わぬ病魔に襲われることがなく、

放逸によって落命したり、水火や災厄によって不慮の死をとげることがなく、一切の厄難は消散し去るのである。ただし眞実心を欠いて念仏を唱えている者はその限りでない」

病氣に罹ることがあっても病魔が近寄らないために軽くてすむのである。法然上人はこれは転重輕受であるとして、次のように述べている。

「病氣に罹ることは前世からの因縁もあることであるから避けられないのである。だからといってどのような神仏に祈ったにしても、それによって病氣が治るといふわけにゆかない。もし神仏に祈ることによって病氣が治ったり、命を長らえることができるとすれば、誰一人として病氣で死ぬ者がなくなる。しかしながら念仏を信じて唱えている者を護り給

うている仏の御力によって、宿命のこともあって重く受けなければならなかった病氣であつても、軽くてすむようにさせ給うのである。まして思いがけないことによって命を落すような災厄を払い除き給わぬことがあるわけがない」

また諸仏ばかりでなく観音、勢至の両菩薩も同じように護念し給うのである。經典は次のように説いている。

「観世音菩薩と大勢至菩薩は来つて念仏する者の勝友となり、常に行者の身に添つて護つていて下さる」

更にいうならば、念仏を唱える者を護し給うのは諸仏や観音、勢至の両菩薩ばかりではないのである。法然上人は次のように説いている。

「念仏を唱えて阿弥陀仏を礼拝し、極楽浄土に往生したいと願っている者があれば、阿弥陀仏は無数の化仏、化観音菩薩、化勢至菩薩を進出し、その行者を護念せしめ給うのである。これらの化仏、化菩薩は二十五菩薩とともどもに行者を百重千重に取り囲み、行者の行住生臥を問うことなく、すべての時とすべての所において昼夜の別なく、常に行者から離れることなく守護し給うのである」

その上に天部の神々に至るまでが守護し給うのである。善導大師は次のように説いている。

「般舟三昧經の行品と護持品の中に、次のように説いている。即ち『釈尊は説き給うた。もし人が専ら阿弥陀仏を念ずる三昧を修めるならば、天部のすべての神々、仏法守護の四

天王、竜神八部衆に至るまでが行者の許に集まり来って、行者の身から離れることなく随所随時に守護するのである。行者は神々から敬愛され、依頼されて一緒に暮らしていることになり、悪鬼邪神が近づく隙間がない。そのために行者は災禍や厄難にあわず、悪鬼邪神に悩まされることがなく、心を乱されることがない』と」

念仏を唱えていれば、このように諸仏から天部の神々に至るまでが守護し給うのであるから自然に天寿を完うすることができる。大師は次のように説いている。

「阿弥陀仏は菩薩たちを従えて念仏の行者の許に来て常には護念し給う。このように護念を蒙ることができて、行者の心は平静に保たれ、身は安泰となる。行者は平安のうちに暮

し、横病がなくて寿命が延び、長命を保って天寿を全うすることができる」
善導大師はこのことを延年長寿の利益であるといっている。

正坐の文化

五月書房選書

安居香山 著

◆煎茶道の文化とその思想◆

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―一四六三

◎「維持会員」へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

三人の比丘尼

— 妙 好 人 の 死 —



安 居 香 山
やす い こう ざん

(大正大学教授・文博)

人生には不思議な縁である。時にはそれが、思いがけないところででき、終生の縁となつて、人生の喜怒哀楽を形成していく。いまここで語ろうとすることも、多くの私の持つ縁の中の一つであるが、晩年になり、人生も終

ろうとするとき、多くの教訓を得た一つである。

私には四人の弟子がいるが、むすこの外は三人とも尼である。その中の一人は韓国の尼である。この韓国の尼は、私が日韓仏教交流

協議会に関係した当初知り会った人で、既に韓国の尼としてり資格を持ち、太古宗の布教師として日本にやってきた白徳仁尼である。

日本で更に仏教の勉強したいということで、大正大学の仏教専修科に入れてあげたのであるが、家を買ひ、立派な仏間を造り、韓国人々を教化していた。仲々のやり手で、大正大学の専科に入るため、私の弟子となった。も十五、六年も前のことである。今日でも私を師匠として、何かと世話をしてくれる。

これが、私の弟子となった最初の人である。次が浦上和子さんという方で、すでに孫が十三人もいるという会社の専務取締役をやっている立派な美しい方である。ここで主に語りたいのは、この人のことについてである。

○

もう七、八年も前のことであつた。或る日一人の中年の美しい女性が、着物姿で私を訪ねてきた。理由は仏教を研究し、尼になりたいという。すでに中年であるから大学に入るのも大変で、しかも尼になりたいという希望は、そう簡単にいくものではない。

聞けばこの方は蒲田に住み、都合できれば増上寺の朝の勤行に出て、お念仏をしているという大変な妙好人であつた。しかもご主人は会社の社長で、ご本人は取締役の重責を持ち、毎日の生活も多忙である。しかし、すでに十三人も孫さんがおられてむすこさん達もそれぞれ独立して、父の仕事を助けておられるという。

「もう年ですから、この辺で尼になり、仏教を勉強したいと、主人の了解も取っております」

ということであつた。

私はもしできたら、大学の仏教専修科に入つたらどうか。なんとか、お世話しましょうということ、いろいろと説明をしてあげた。

「ただその為には、浄土宗に籍を持たねばならず、師匠をきめねばなりません」

と、その間の事情を説明した。

「よく分りました。主人と相談して、改めてご相談に参ります」

と、その日は帰って行かれた。

ところが、あるく日再び尋ねてこられたとき「アッ」とばかり、私は仰天した。あの黒髪はばっさり切り落し、ツルツルな頭で出て

こられたのである。

「私は先生の弟子にして頂くことにいたしました。何分とも宜しくお願いいたします」

ここまでされたのではどうにもならず、これを了承し、真野龍海君の寺でその得度式をしてもらい、仏教専修科にも入学が許可され、毎日勉強に励んでおられた。専修科の学生は若いので、浦上尼の子供のようなものであつた。それだけに、何かと学生の世話をし、したわれた。そして、二年の学習を終え、浦上尼は、尼の資格をうるために、増上寺で加行を受けられた。

弟子となつてからは、何くれとなく私の世話をやかれた。私の講演などには必ず出席し、韓国へも日韓仏教の関係で一緒に行かれた。

又、増上寺でも大切にしてもらい、仕事を何年か手伝われた。特別に一室を与えられ、お手伝い旁々、念仏に励まれた。家業はそっちのけの生活で、随分今までは違ってきたに違いない。

「先生、身体を大切にしてくださいよ」

これが、会った時、別れる時の浦上尼の言葉であった。浦上尼は「和子」さんと言ったので僧名は、私の一字をあげて、「和香」とした。これも大変喜んでおられた。

ところが或る日、

「少し胸が痛むので、検査をうけます。なに大丈夫ですよ」

と相い変わらぬ強気であった。しかし、すでにその時は、肺が癌に相当犯されていた。そしてそれはどんどん進行し、ついに駒込病院

で肺摘出という大手術を受けられた。

人生はままならぬもので、私もその時、腹の病気に犯されていたので、互いに注意しあい、励ましあっていた。浦上尼の苦痛は大へんなもののように、酸素ボンベをかかえての治療であった。達筆で筆まめな浦上尼は、そんな時でも、よく手紙を頂いた。

「もう駄目かと思いますが、毎日お念仏を申して、痛みをやわらげて頂いております。万一の時は、先生とお浄土でお会いいたします」

そんな便りが、しばしば届いた。私もどうすることもできず、弥陀の願力に頼って、お念仏を申して下さいと、返事をしていた。一時、退院されたが、それも酸素ボンベを抱えてのことであった。そして、再度、日赤に入

院されたが、ついに力尽き、矢折れて帰らぬ人となつてしまわれた。享年六十二歳で、この四月十日のことであつた。

人生はまさに無常である。そして私は、大切な弟子に先立たれてしまった。正直なところ、私が先にゆくと思つていたが、逆になつてしまった。これも又人生と言えば人生であるが、まさに生者必滅は、そうした常識を越えた世界で、作動している。

「母も、食物がのどを道らなくなつてから、急に氣力を喪失し、予想していない早さで、死がやってきました」

娘さんはそう述懐していた。

病氣は、氣の病いという。氣力も、時に癌を剋服することもあるという。弟子の教訓を私も見習わねばと考えている。それに、一人

の尼の死は、大きな人類からすれば、大海の一粒にすぎない出来かも知れないが、私にとっては、妙好人のこの尼の死は、決して軽いことではない。こうした人が、一人でも生きていて活躍して欲しかったと、悲しみの思いと共に、無念な思いが、未だに私の脳裏から離れない。

浦上尼は、有名な彫刻家に、阿弥陀如来の製作を頼んでいた。相当な経費のものらしい。

「これをお祠りするお堂を作りますから、

先生開山上人になつて下さいね」

そんな夢も持つておられた。これもまた実現しないままに、浄土に急がれた。



第三の弟子の尼は、台湾生れで母が日本の

方である。林静というこの人は、私が会った時は、まだ十九歳位であった。どうした縁でか、大変な念仏信者で、増上寺の朝の勤行にも出掛け、念仏をしていた。浦上尼との結ばれも、これが縁であったようである。大変な美人で、小柄ではあったが、実にすがすがしいよい女性である。私の弟子は、まことに国色豊かである。

「先生、もう一人お弟子にして下さい」

浦上尼はそう言って、愛称「林ちゃん」を紹介した。大正大学の国文科に入り、尼の資格も取るとの事であった。そしてその通り、四年間努力し、少僧都、擬講の位まで取ってしまった。大変な努力家である。

私は心よく弟子として迎え、我が家のお堂（寺ではないが、四畳半の仏殿を建てている）で、

大学入学の時、得度式をしてあげた。縁とは不思議なもので、その後、福島の大寺の森君と仲良くなり、シンデレラ姫ではないが、この五月結婚式をあげた。仲人を頼まれたが、病気の為駄目になったが、盛大な結婚式であったようである。

千軒の檀家があるこの寺で、皆にしたわれ可愛がられている。この女性なら当然のことであろう。やがて寺庭夫人として、この妙好人は、大いに活躍することであろう。

私はいろいろと恵まれているが、この三人の尼弟子にめぐまれたことも、幸福者であった。それにしても、浦上尼の死は、余りに早すぎた。今はただ静かに冥福を祈るのみである。

四

行

詩

鷺 草

(さぎそう)

私を見てくださいと
白い花はいう
翼を広げて 飛び上がれ
日射しの中へ 舞い踊れ

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



◇◇◇新刊紹介◇◇◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

TEL (03) 2211-0311

(童)(話)(の)(世)(界)
〔Ⅳ〕

音(その四)——「ホカホカホカってなんの音」



ぬのむらてつや

ぼくは南天の実。

スクスク コッコ ポトポトト

スクスク コッコ ポトポトト

木の葉のおばさんのスクスクという声と

コッコのオンドリの歌と ポトポトみんな
の涙で土の中に芽を出したぼくです。

ぼくはなんにもしなかったけど その音が
いつもまわりでしていたのです。

ぼくがなんにもしないのに ぼくの上に木
の葉のおばさんがおりてきてくれた。

ぼくはなんにもいわないのに ぼくの頭の
上でオンドリが鳴きました。

ぼくがたのんだのではないけれど、ぼくのまわりをみんなの涙がぬらしてくれた。

どうしてだろう。

どうしてぼくだけが、この土の中で芽を出したのだろう。ほかのみんなが鳥にたべられたり、くさったりしてしまったのに。

なぜだろう。

そのあいだにも、スクスクココポトポトの音がきこえると、土の中の芽がムズムズとうごくのです。じっとしていようとおもっても、うごかないではいられなくなります。小さいけれど芽が上へむかってずんずんとうごきはじめるのです。

ところが、うごけばなにかにぶつかります。

「イタタタタ！」

そうでした。上にはどっしりと石どうろうがあるのをわすれていました。大きな石がいくつもつまかさねてあるのです。どのくらい

のおもさがあるのかわかりません。牛や馬の頭分のおもさがあるかもしれません。

スクスクココポトポトと、のびたい南天の芽も、こればかりはどうしようもないのです。おしてみましたがびくともしません。とんとんとたたきましたが、われるはずもないのです。

もちろん穴をあけることなどできっこないでしょう。

このようすをみていたミミズのおじさんがいいました。

「そうだ、アリにたのんでみたらどうかね。物をはこぶのがうまいアリだから、この石をはこんでくれるかもしれないよ」

土の中へえさをはこびこんできたアリがこたえます。

「だめだめ、それにむりだよ。ぼくたちがどんなにたくさんよってたかってもこの石はう

ごかせない。どうしてもというなら象にたのんでみたらゾウでしょう」

「それもむずかしい。ここは動物園でもアフリカでもないんだから象さんなんかいるはずないよ」

「それならば人間にたのんだら」

アリがいました。

「それはもつとむりだね。すきなことばかりやる人間が こっちのいうことをきいてくれるはずがない」

ミミズのおじさんが首をふりました。

「こまったな どうしたらいいんだろう」

そんなあいだにもムズムズと芽をのぼして石にぶつかり泣いている南天の実をみて アリがまたいます。

「なんにもしないで こまったこまったといっているのだめだよ。こうなったら石のところへいったのんでみたらどう」

「石のところへだつて。だいいち石がしゃべるはずがないもの」

「それはやってみなければわからないさ」

「だめだとおもうけれどなあ 石はいつもだまっていて話をしているのを見たことないよ」

ほんとうに石はしゃべることができるのでしょうか。たとえ話をするにしてもどのようなしてしゃべるのでしょうか。石には口があるのでしょうか。

でも南天の実はおもいきってききました。

「石さん石さん なにかしゃべってくださいな」

しかし石はうんとすんともいいません。

「おねがいします。どうかへんじをたのみます。あなたがいるので ぼくは地上へでられない」

それでも へんじはありません。

「あたりまえなんだ。もともと石がしゃべるはずがない。もうあきらめた」

「やっぱりだめか。相手にならない」

そばにいたアリもミミズも　とうとうどこかへいってしまいました。

南天の実がひとりになったそのときに　きこえてきたのが　スクスクココポトポトの音。

「そうだった。あわててはだめだった。ほかにすることがあるはずだ。芽がのぼせられないのなら根っこをのぼそう」

ムズムズとのびて石にぶつかった一本の根は　イタタイタタといいながらほそい二本の根になります。

「ぼくはこっちへきみはあっちへとわかれてのびよう」

二本の根はそれぞれ石にぶつかって四本に。その四本もまたまたぶつかって八本に。八本

はさらに石につきあたって十六本。十六本は三十二本。三十二本は……どんどんふえていきました。

いつのまにか土の中の石のまわりは　こまかい根でいっぱいになります。網の目のようにして　根っこが石をやわらかくつつんだのです。

ホカホカホカ

石の中から音がするではありませんか。じっと耳をすませてごらん下さい。石にさわってみてください。手の中にそっとにぎってみるように。

ホカホカホカ

しずかだけれどあたたかい声です。やわらかく火がもえているようにきこえます。

そしてあれほどだまっていた石が　ゆっくりとはなしはじめたのです。

「みんながまわりにあつまって　ホカホカの

ことばがしゃべれるね。ああうれしい。

ホカホカと地球の中心もえている。

どろどろ火の海　ホッカホカ

真っ赤になって　ホッカホカ

わたしは火の石　ホッカホカ

そこがあんまりにあついで　あるとき

ドドドーっと　外へとびだして　おしくらま

んじゅうくりかえし　だんだんかたい石になる。

それでもわたしはわすれない　あのホカホ

カの火の石を。いついつまでもわすれずに

みんなといっしょにホカホカと」

根っこにつつまれた石は　遠いむかしをお

もいだしているようでした。

「そうだったのか」

南天の実がいいました。

「ふまれても　たたかれてもだまっている石
さんだけど　いっしょにいるとうれしいんで

すね。大きな石も小さい石も砂つぶさえも

みんなホカホカあたたかい。ほくは芽をのぼ

すことをあきらめて　ここでみんなと仲よく

すごすことにしよう。石さんとはながいで

きただけでもよかったんだ」

つぎの朝　目を覚ました南天の実は上を見

あげてびっくりぎょうてん。

芽の上に　あの石がないのです。目をこす

ってよく見ましたが　たしかにありません。

石が横にうごいたのです。

こうして芽はふたたび地上へ向うことにな

りました。

(つづく)

木

下

陸

一

随

筆

集

28

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(14)—

木の
下
陸
一

虎徹が我が家の犬になってから、ハチは一度だけ姿を見せた。虎徹が来て間もなくのことだったと記憶している。

虎徹の鼻は父親の匂いを覚えていたのか、喜んでじゃれついたが、ハチはそんな虎徹の全身を丹念に、時には鼻先で小突き、突き転ばして嗅ぎ廻した。異様とも思えるハチの仕種だった。

「ハチ、どうしたの。お前の子供じゃないの。もっと優しくしておやり」

見かねて母が言うと、ハチがジロツと母を見、虎徹の鼻をベロツと舐めると、これで点検は終わったとばかりに、後ろも見ずに去って行った。ジロツと母を見た時のハチの目は、いま思い出してもぞっとするような冷たい目であった。

「うちで犬を飼うと、ハチは来なくなるかも知れん」と言った父の予感、不幸にも的中した。それっきりハチは現れず、また天理教会の階段の上に、その姿を見ることもなかった。どこへ行ってしまったのかな、と気にはなったが、虎徹と遊ぶのにかまけて、行方を探すまでには至らなかった。蓮見小五郎にも尋ねてみたが、

「へえー、そうですか。しばらくうちにも来ませんが……」

と、訝しげな顔をした。そして、多少ためらいがちに、

「もしかしたら、山の中に彼女がいるのかも知れん」

と呟いた。

「山の中に彼女?!」

「時々、疲れきって、体中ダニだらけにして来ることがあったんですわ。赤い灰みたいなダニで、これは山の中にしかおらん。全く始末におえん奴でね」

まさか灰のようなダニがいる訳はなかったが、香具師の出である小五郎の、はったりを効かしたこういう言い方が、私は嫌いではなかった。まま常軌を逸する嫌いはあったが、言動はユーモラスで、思わずニヤリとさせられるのが好きだったのである。この時もそうだった。灰みたいなダニといった舌の根も乾かぬうちに、

「とにかく細かいんだよ。バラの芽なんかに付くアブラムシ、アリマキと言ったかな——いや、あんなに小さくはないか」

と、さっさと前言を翻した。

「まあ、犬を飼えばいろいろなことがあるよ。分からんことだらけだよ。わしでさえそうなんだから、お兄ちゃんもこれからいろんな経験をするとと思うよ。犬って奴は、全く思いもかけぬことをしかすから……」

小五郎が言ったように、虎徹も、思いもかけぬことをよくしかしてくれた。

ある日、門の格子戸（ハチが作った潜り口は修理して塞いであったが）をちょろっと抜け出したかと思うと、しばらくして糞尿だらけになって帰ってきた。当時は畠の下肥に人糞をまいていたので、その畠を駆け廻って帰って来たのである。早速、石鹼を付けて洗ってやったが、臭気はなかなか抜けず、匂いが取れるまで数日庭に繫いで謹慎させたが、人間が辟易する臭気が、犬にとっては極上の香料でもあるのか、その後も連れて歩いていてそんな畠に出会すと、その方へ行きたがって仕方がなかった。それも施肥した直後のものより、二、三日経って乾き加減になったのを好む傾向が強かった。蛙や蜥蜴の死骸も、虎徹には香料の一種であった。先に走って行って、急に引っ繰り返って地面に背中をこすりつけて嬉々としているので駆けつけてみると、そこには決まってそんな動物の干涸びた死骸が転がっていた。母に話すと、

「あーあ、いやだいやだ。今度そんなことをしたら、部屋に上げてやらないから」

と眉をひそめたが、人間だって麝香鹿の腹を断ち割って麝香を採取したり、抹香鯨から竜涎香を得て珍重しているのだから、犬の所業をさげすむのは筋違いじゃないかと思ったりしたことだった。

産毛が抜けて夏毛に生え変わると、体つきが細っそりと引き締って見え、虎徹はようやく幼犬の域を脱して颯爽としてきたがに依然耳は立ちきつていなかった。あと一息というところまできているのに、それからが一向に進まないのである。その原因は分からなかったが、あるいはあれが、と思い当たる節が私に無い訳では無かった。友人の自転車を追いかけて走っている最中、あつという間に虎徹は後輪に巻き込まれたことがあった。どこにも外傷はなかったが、車輪は確実に首の辺りを通過したのであるから、少なくとも車体の重量と友人の体重で、子犬の首筋を踏みつぶしたことになる。外見は何ともないが、あの事故で成長ホルモンの分泌に異常をきたしたのではあるまいかという思いが、絶えず私につきまといて離れなかった。しかし、突然痙攣を起こしたり、嘔吐を催すということもなく元気にしているので少しは安心したが、ただ耳が立たないのが気掛りだった。

「コテ、どうしたのお前。はよ耳お立て！」

齒痒がった母が洗濯挟みで虎徹の耳を挟むと、虎徹は一瞬キョトンとしたが、次の瞬間ギャンと鳴いて狂ったように暴れ出した。洗濯挟みは直ぐ私が取ってやったが、虎徹はしばらく前足で頭を引っ掻いてヒイヒイ鳴いていた。試しに私は自分の耳を洗濯挟みで挟んでみた。たかが洗濯挟みぐらいでヒイヒイ言いやがって、だらしがないぞ！——軽い気持ちで始めたのであるが、洗濯挟みの力は意外に強く、挟んだ途端、「痛て！」と言って私は跳び上がった。不意打ちをくらった子犬が、暴れるのは当然のことであった。

「可哀そうに痛かったろう、さあ、お母ちゃんに噛みついてやれ！」

だが、虎徹は私の腕の中でいつまでも震えていた。のちに何度となく修羅場を潜って、体のあちこちに男の勲章をぶらさげた虎徹ではあったが、初めて噛みつかれた相手が洗濯挟みだったとは……。こんな体験をした犬は古来稀なんじゃないだろうか。余程こたえたのか、その日はとうとう母に近寄らなかった。

しかし、不思議なことに、激痛が眠っていた脳細胞を刺戟したのか、母への反撥心がそうさせたのか、その翌日から、虎徹の耳は立ち上がる気配を見せ始めたのである。そして二日で完全に立った。

「コテや、よかったなあ」

母は自分のしたことに心を傷めていたらしく、虎徹を抱いてボロボロ涙を流した。虎徹は虎徹で、母の頬を伝う涙を舐めて、全身で喜びを表していた。耳が立ったという体の変化を意識して喜んでいたとは思えないが、母と和解できたのが嬉しかったのであろう。虎徹にとって、一番甘えられる相手といえば母だったのだから……。

当時の古びた句帳に下手な字で、

五月晴ひよこり子犬の耳が立ち（6・18）

の句が記されている。「六月十八日、珍しく梅雨晴れで、その日ひょこり子犬の耳が立った」というメモ程度の駄句に過ぎないが、輪禍を危惧していた私には感動的な出来事だったから、いまでは妙に心に残る数少ない句の一つとなった。

一方、その後もハチの行方は杳として知れなかった。学校で友達に尋ねても、誰一人と、

してハチの消息を知る者はいなかった。

「ハチも齢じゃ。どこぞで野垂れ死にしたらと違うか」

と、氣に障ることを言う奴もいたが、その恐れは十分あったので、反撥の仕様がなかった。そんな中で、ハチの情報私に呉れたのは、意外にも身近にいる友達だった。妙正寺に隣接するお宮の宮司の孫で、私が堀川町に転居したのと同様して神戸から転校して来た尾島という男だった。家が近かったから、尾島とは誘い合わせて登校する仲だったが、組が違っていたので、私がハチを探していることは彼には通じていなかったのである。まさに灯台もと暗し、であった。

「何や、君知らなんだのか。ハチなら妙正寺の裏山へ、よう上がって行きよるで」

「ほんとか?！」

「ああ何度も見かけた。山の奥に彼女でもいるんとかやうか」

都会育ちの少年は事も無げにそう言い放って、理由もなく私を赤面させたが、以前蓮見小五郎が同じようなことを言ったのを思い出して、山の中にハチの老後の安住の地が、もしかすると、終の栖となる地があるに違いないと、私は確信した。

「一週間ほど前、午後から天氣がよくなった日があったやろ。あの日の夕方、妙正寺と蜜柑島の間の道を上がって行った。ちらっと後ろ姿を見ただけやが、間違いないよ。虎徹連れて探してみたら。……息子に会いに出て来るかも知れんよ」

尾島に言われるまでもなく、私は早い機会にそうしようと思った。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^くの生涯 (七)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ}
浦^{うら}
行^{ぎょう}
真^{しん}

福 知 山 へ

仏教音楽についてはまた触れるとして、明

治二十六年（一八九三）の夏、岩井智海は京都府下の、いまは市であるが、当時は天田郡内の町であった福知山の法鷲寺^{ほうじゆじ}第三十三世住職となっている。景久院を辞して三年目のこと

である。

嵐演激著の私家本「法鷲寺物語」^(註1)によると、この経緯というのがまた奇縁であった。

明治二十五年十二月初頭のことだったという。折から山陰道への布教の旅^(註2)にあった智海は、当時の法鷲寺住職・富田大闡^{とんだいなん}とはかねてからの知己だったので、途中、立ちよって会うことにしたのである。

ところがいざ玄関に立って案内を請うと、どうもなかの様子がざわついている。何かあったなと思ったのもそのはずで、たったさつき大闡和尚が遷化したというので、総代をはじめ檀中の有志が集まり、葬儀の相談の真っ最中だったのである。これには智海も驚いたにちがいない。しかしこのまま去るわけにもゆかず、請われるままに、翌日の葬儀に弔辞を述べることにした。

この「友を悼むの辞」が素晴らしかった。

弔辞に「素晴らしい」はないかもしれないが、事実、そうだったのだから仕方がない。哀々切々として参列者の心をうち、深い感動を呼びおこしたのである。それで式後、後任住職について世話方一同が協議した席で、「ああいう和尚に来てもらえれば、どんなにありがたいことか……」となってしまった。これからみると、山陰方面へ布教に行脚中だったことといい、彼の口演はすでに非凡の域に達していたとみられる。

しかし東京から福知山へ転ずるには、やはり多少の決心がいったにちがいない。東海道本線(東京―神戸間)は明治十四年にすでに全通していたが、京都―福知山間は昔ながらに徒歩でたどるしかない時代だったからである。^(註3)

にもかかわらず入山を承知したというのは、やはり法鷲寺が一介の青年僧にとって、魅力

のある寺院だったからではなかったらうか。

この寺院はもと福知山の町はずれにあり、天台宗だったが、廃寺同様になっていたらしい。それを永禄十一年（一五六七）に浄土宗の僧・実譽靈尊が喜捨を得て、地所を町内の呉服町に選定し、当時、奥丹波唯一の念仏信仰の中心道場として堂宇を創建したのだという（のち現在の紺屋町に移転）。

くだって江戸時代になると、徳川家の念仏信仰にならって代々の福知山藩主が法鷲寺に帰依したが、さらに寛文九年（一六六九）に朽木植昌^{ききあきまさ}三万二千石が常陸^{ひたの}国土浦から入封してからは、朽木家の帰依菩提寺にもなった——そういう由緒をもっているのである。

それともう一つ、どういうわけか彼は山陰地方へ、ちよくちよく説法にでかけていた。智海^{ちかい}の膝もとで育ったといってもいい法弟の山田智旭は、もと家政学園高等学校長でもあ

った人だが、その前任者の鵜飼光順から、「あんたのお師匠さんの岩井智海さん、若いときにバイオリンを持って布教に見えたこと、覚えてますよ」

といわれたことがあるという。鵜飼師は鳥根県^{とね}の出身なのである。

ついでに書いておくと、その同じ若いとき智海は修業のために、「謝礼なんて問題ではない。そんなことは気になさらないから、どうか一つ説法をやらせてくれ」といい、いわば「押しかけ布教」とでもいうのをよくやっていたと、これも師匠から直接、山田師が聞かされたという回想である。友の死に際会して述べた哀悼の言葉が、檀信徒のあいだに感動を呼んだというのも、こうした苦勞の積み重ねの上に成ったものだったのである。

そしてまた彼が「仏教音楽論」を書いたのはこの法鷲寺時代のことであり、仏教音楽へ

の思い入れがもつとも高潮していた時期だったことを思えば、バイオリンを持っていたの布教も、すでにこのころから始まっていたと推理しても、不自然ではない。それやこれやを考へあわせると、山陰を中心に、近畿も含めた布教の基地として、法鷲寺は好都合な部分もあったのではないか。

岩井智海の晋山は、住職就任の懇請をうけてから約八ヵ月後の明治二十六年（一八九三）八月七日だったと、記録にある。

三十一歳であった。

この日から彼は、明治三十一年七月十八日に大阪府堺市の旭蓮社大阿弥陀経寺の住職を拝命するまで、およそ五年間、法鷲寺を舞台に活躍することになる。そしてその活躍によって、

——浄土宗に岩井智海あり。
と、知れわたることになるのだ。

彼が法鷲寺に晋山したとき、寺には九十七歳になる老婦人がいた。千葉富ちよばとみといい、先々代・千葉諦巖ちよばたぎんの老母である。智海の知己・大闡和尚は諦巖老和尚の弟子だったから、あとに残った師の老母をみるのは当然だが、智海もまた同様にこの老母の世話をした。そのときの回想を、彼は「五重講話」の説法の一端に織りこんでいる。それは岩井の人柄を伝えており、かつまた彼の説法がどんなものだったかを知るすがにもなるので、ここにそのまま掲載することにした。口演の速記だから、黙読せずに声にだしたほうが、抑揚はつかめないにしても、一つの調子というか、メリハリみたいなものは感じとることができよう。

『私は丹波の福知山の法鷲寺といふ寺に、六年（ごじ）程居ったことがあります。私の先代（せんだい）

老僧の母親を六年程お預りして、百二つまでお世話をしたことがあります。私の袈裟等は皆このおばあが縫ひたのを縫うて呉れられ、却々健康なお婆さんでありました。此処にこんな掛図がありました。

長命はただ働くにしくはなし

流るる水のくさらぬをみよ

人間は適当に働けば決して病氣をするものではないといふ確信を有つて居りました。併しこの年寄りといふものは却々孝行の仕悪いものでありまして、説教の上、書物の上では孝行は美しく説けるけれども、自分がやってみようといふと却々年寄りの氣分に満足を与えるといふことは困難。何か御馳走が出来たから食べさせますと、顔中が地震ゆつて折角の御馳走ぢやけれども食べられんといふ。何でも非常に以前から謡が好きだったとい

ふから、幸ひ福知山に謡ひの大家があるからおばあさんお好きな謡ひを今日は聞かせてやらう（という）、「昔は俺もきちがひになって癡ったものぢやがとんと耳が遠うて」。芝居でも来たら見せてやらうと思ふと、「芝居等も随分夫にねだつて行つたものだがもう眼がうとくなつてしまった」。どうですか天氣が好いから野山へ行つてお弁当でもひろげようではないか（という）、「もう足が揺らついて」（と）、殆ど人間の楽しみを失つて居る。どうも斯ういふおばあに美しい着物、七つ八つの子供の着物も着せられませんが。偶々この老婆に一人の娘がありません。この人が来て呉れると歳取つて居りまして話の種は尽きんものと見えまして、一日夜昼話をして時々笑ひ声も交へる、顔には本当に喜びと満足を湛へて、

是が一番親孝行のやうであります。私はこの時に老人の心理を研究するに、どうして年寄りを慰めるか。子孫の訪問といふことを考へる、年寄りを慰めるには子供や孫が優しく云つてやる、親切にしてやる、之が年寄りに対する一番孝行、子や孫の訪問といふことが一番年寄りを慰めることが多い様に思ひます。時に私が久しくお出でぬとお婆あが淋しうして居るから訪ねて呉れと、時にお娘さんを頼んで来てもらう。而して来てくれられた時にお出たよといふと、さうかあの子が来たか、あの子この子と言つて喜ぶお婆あ、あの子この子は、いったい今年はどう幾つになる、七十ぢやが、七十になつてもやはりあの子この子と云つて喜ぶ、誠に思へば仮ひ我子が七十になつて自分は百二つになつても、我子に対する慈愛

の暖かさはとても口にも筆にも言へぬ。普通ならば七十年もお母さんの顔を見て居るから、もう見飽いたと云ふべきに何時迄経つても見飽かざる所は、親子の愛が如何に生命の長いものであらふか知られる』(岩井智海「五重講説」)

岩井智海という人はかなり気性の激しい一面があつて、時にはカミナリを落したりするのだが、しかし弱者には優しくして親切であつた。

たとえば、こんな挿話が残っている。

この法鷲寺のあとに岩井が住職をした堺の旭蓮社でのことだが、境内や墓の掃除をしたりする、もう三十をとくにすぎた「政やん」と呼ぶ男衆がいた。気の毒にもこれがいささか頭が弱いうえに、毎日ではないが、ちよくちよく寝小便をする。ときどきはつまみ洗い

くらいはしていたらしいが、それでもやはり男衆部屋には異臭がただよ。お手伝いはいたが、汚がつて手をつけない。これはまあそうであろう。すると岩井は——旅に出ていることの多い和尚だったが、うまいぐあいに自坊にいてしかもそれが天気のいい日だったりすると、「おい、政。フトンを出せ」といって、梯子を掛けて屋根にあがり、その臭いやつを広げて天日に干してやったりしたそうである。

こういう挿話から推しはかつてみても、法鷲寺で先々代の老母に、退屈しないようにと細かく心をくばったというのは、本当であろう。岩井智海は自分が少年時代に苦労したせいもあって、人の痛みのわかる人物なのであった。

彼が「仏教音楽論」を京都の法蔵館から刊

行したのは、晋山した翌年の明治二十六年七月のことである。多分、その論集と合本してではないかと思われるが、さもなくばほとんど時を同じくして、やはり法蔵館から「仏教唱歌集」も発行している。

唱歌集はいずれも『岩井智海選曲』で、仏教唱歌の嚆矢とされているものである。これについて、岩井と親交のあった高橋良和が、つぎのような一文を書き残している。

『岩井智海は浄土宗の門主であるとともに、総本山知恩院の門跡である。また説教の權威であって、近世における浄土宗の説教の第一人者であった。知恩院に入山後、満州国に赴き満州各地の布教所を慰問し、新京において当時の統治者の代表とも会見している。

ところがこの布教者が、当時の上野の

音楽学校出身で、しかもバイオリンの名手であった。布教に従事するようになつてから、バイオリンを演奏することにはなかつたが、非常に声の美しい人で聴衆を魅了した。そういつたことから若いころは、よくバイオリンを演奏したし、また初期のときは、声の美しい布教師で売り出していた。

この岩井智海は明治二十年（一八八七）七月に、仏教唱歌集を出版している。おそらくこの唱歌集が、讃仏歌の我が国における最初であるといえる。それ以前にこうした讃仏歌があったことを知らない。（中略）

この中の法の深山の詩は、今もうたわれている。あの、

法の深山の桜花

昔のままに匂ふなり

道の枝折の跡とめて

さとりの高嶺の春をみよ

というのであるが、もう一つ「善悪」という詩もこの曲で歌うように詩を記している。というのはこの曲は、雅楽の越天楽からとつたものである。（中略）

岩井智海の選曲になるこの讃仏歌は、どのようにして曲を選出したのかそれは疑問である。古い名曲を選択してそれに詩をもってきたものと思われる。作曲者もまだいない仏教の各派であるから、岩井智海は新しい布教をこれによつて行い、また自らもバイオリンでうたつたと思うと、近世仏教の音曲の最初の人であるといえる』（高橋良和「自伝的児童文学史」）

筆者が見たのは岩井の著書「道しるべ」に再録された唱歌集だが、二十九の歌詞にたい

し譜面は十一曲が記載されていた。高橋もちよつとふれているが、これは一つの曲で異なる歌を重複して歌える仕組みになっているからである。岩井が「一水」の筆名で記している凡例はんれいによると、歌詞は『吉田蕉巖師其他の諸師の新撰』だそうだが、「如是我聞」を冒頭におき、中には不殺生戒に始まって不偷盜戒、不邪淫戒などとすすみ、不邪見戒に終わる、いわゆる「十戒」などまでが唱歌化されていて、それが筆者には興味ぶかった。

おもしろいのは楽譜で、現代のようなオタマジャクシのついた五線譜ではなく、123……と数字を使った数字譜であることだ。(注5)これはガラン・バリ・シュヴェ式数字譜とよばれ、十八世紀半ばにフランスで発明されたもので、明治初年に日本に輸入され、長く唱歌教育に用いられたものだという。五線譜が日本に定着するのはだいぶ後のことである。ハ

ーモニカの譜などはいまだにこの数字譜を使っているのがあるそうだ。

「仏教音楽論」のなかで岩井は、伊沢修二を「わが師」とよんでいる。伊沢は米国の師範学校からハーバード大学に留学、帰国して東京師範学校長のときに、文部省に音楽取調掛が創設され、その所長に転じた人で、この音楽取調掛がじつは東京音楽学校の前身なのである。彼は数字譜を使ってドレミファを日本式に「ヒフミヨイムナ」と歌う方式で唱歌教育のカリキュラムを創案した。この伊沢方式が音楽教育の基礎となり、それを無批判に踏襲したから日本人の音楽的感覚は発達が遅れたと、後世、悪口をいう人もあるが、それはこのさい別として、岩井が音楽学校に入学生たときの校長がこの伊沢であった。当然、岩井も上野ではこの数字譜で音楽を学んだはずで、かつまた彼が師にならって仏教唱歌の

最初の人となったのも、ごく自然な成り行きだったといえるかもしれない。

ところでこの仏教唱歌の曲については、浄土宗の僧籍にある音楽家で、讃仏歌から詠唱歌にいたる作曲で知られる松濤基道が、山田智旭あての書信のなかで、

『……特に後半、譜面の曲調、現在の宗歌の旋律にいたる母型を見せており、大変興味を覚えました』（昭和六十一年十月二十八日付け松濤基道書簡）

と書いているのが、一つの評価ともなろうか。

一方、音楽論のほうは音楽の起源から筆をおこし、その沿革から効用におよんだもので、四百字詰原稿用紙で約三十五枚にのぼる論文である。

その構成はまず起源の章では、仏教の教理からいうと音楽の基礎をなす『五音七声は本来法爾として（『ごく自然に』）存在し、始もなく終りもなく悠々蕩々』としたもので、もともと特別に生じたものではないと説く。

ついで沿革の章ではさまざまな引用を重ねて音楽はもとインドに発したものと断定し、その東に向かったものが短音階すなわち律曲に、西に向かったものは長音階すなわち呂曲に長じてゆき、その結果、前者は多く優美さを、後者は多く勇壮快活さを特長とするようになっていったと論をすすめてゆく。

最後の音楽の効用では、いわゆる俗曲をきびしく批判しつつも、『蓋し音楽なるものは性情に基けるものなれば、法律を以て之を厳禁せんか。恰も生れつきたる鼻目を剥げと命ずるが如く到底為し得可からず』として、高尚な音楽を普及させることで、卑猥な俗曲を

退けるほかはないと展開してゆく。そして「音楽は健康を保全する」「音楽唱歌は労苦を慰め業務を奮励させる」「音楽は極悪心を化して善心を生じさせる」など六つのテーマを掲げ、傍証もそつなく並べて解説してゆくという構成をとり、結論として、日本で音楽を発達させ維持したのは、^{（生）}声明を中国から伝来した弘法大師空海、慈覚大師円仁以下、すべて仏家の手にならざるはないとし、「音楽の利剣」をもって大いに仏法を弘め、法城を蔽護しようではないかと、世の仏教家たちへの呼びかけで結んでいる。

当然ながら全編を通じるトーンは仏教と音楽の讃嘆につらぬかれており、音楽のもつ娛樂性については攻撃的な展開となっているが、これは明治二十年代という、西洋音楽が日本に渡来してまだ間もない時期だったことと、テーマが「仏教音楽」であったことを思えば、

やむをえないかもしれない。ただ筆者が感嘆したのは、裏づけに引用されている經典の豊富さである。たしかに彼は専門の仏教学徒ではなかったが、その蓄積と知識の厚さは、はるかに水準をぬいていた。

この音楽論については野村芳雄という人が、同じく山田に送った書簡でふれている。野村は同志社女子高等学校校長、同理事などを歴任したが、作曲家でもあり、校歌や、京都の藤井大丸など社歌もたくさん作っている人である。その手紙には、

『……明治二十七年頃にあのような卓見を述べられ、また讃仏歌を作曲作譜されたことを敬服、かつ驚嘆させられました。音楽発祥の地がインドにあることをあらゆる点から立証され大変教えられました。平等院の天女楽人の持つ楽器から私もそ

うではないかと感じていましたが、解明され嬉しく存じました』(昭和六十二年六月五日付け野村芳雄書簡)

と書かれていた。

(つづく)

(注1) 嵐演激師は法鷲寺の前住職で第三十六世。「法鷲寺物語」は同寺をめぐる沿革や歴代住職の挿話などを記述してある。昭和六十三年十一月刊。

(注2) 「法鷲寺物語」では、『大和当麻寺一支院岩井智海住職はたまたま真言宗の委嘱を受けて山陰道を布教』となっているが、「道しるべ」その他の略伝などには見えない。これにかんしては未調査なので、ここではしばらく略伝によることにした。

(注3) 京都―福知山間(八八・五キロ)に鉄道が通じるのは明治四十四年のことである。それより先、明治三十二年に大阪

―福知山間の福知山線が開通した。なお山陰本線の全通は昭和六年である。

(注4) 岩井智海著「五重講説」では「先代」となっている。百二歳という老婦人の年齢から計算すると、「法鷲寺物語」が「先々代・諦巖和尚」としているように、その方が適合しているので、それにしたがった。

(注5) 参考までに「法の深山」の讃と歌詞を次頁に掲載しておく。

(注6) 弘法大師空海(七七四―八三五)は真言宗の開祖。三十一歳で得度、八〇四年にのちの天台宗開祖・伝教大師最澄らと入唐(中国)し、長安の青竜寺で恵果につき密教の伝授を受けた。八〇六年帰国し八一六年に高野山に金剛峯寺の基を開き、八二三年には未完成の東寺を得て真言密教の道場とした。また八二八年には日本最初の庶民の学校・綜芸種智院(そうぎしゅちゐん)を創設した。

法の深山

(ハ) 4 調 4	1	1	2	2	6	6	5	6	2	2	2	1	2—・・
(1)	の	ー	り	の	み	や	ま	の	さ	く	ら	ば	な
(2)	ノ	ー	リ	ノ	ミ	ヤ	マ	ノ	ホ	ト	ト	ギ	ス
	1	1	2	2	3	3	5	3	2	2	2	1	2—・・
	む	か	し	の	ま	ー	ま	に	に	ほ	ふ	な	り
	ム	カ	シ	ノ	マ	ー	マ	ニ	ナ	ノ	ル	ナ	リ
	6	6	6	6	6	ー	5	3	6	6	5	6	2—6 5
	み	ー	ち	の	し	ほ	り	の	あ	と	と	め	て
	ウ	キ	ヨ	ハ	ユ	ー	メ	ゾ	ミ	ヂ	カ	ヨ	ー
	3	3	5	5	6	6	5	3	2	2	2	1	2—・・
	さ	と	り	の	た	か	ね	の	は	る	を	み	よ
	ヲ	ド	ロ	キ	サ	ー	マ	ス	コ	エ	ヲ	キ	ケ

法の深山

法のみ山の桜花
 道の枝折の跡とめて
 法のみ山のほととぎす
 浮世は夢ぞ短か夜と
 法のみ山の秋の月
 教の風に胸の雲
 法のみ山の白雪は
 身をも捨てつる跡ふみて
 昔のまゝに匂ふなり
 さとりの高嶺の春をみよ
 昔のまゝになるなり
 驚きさます声をきけ
 昔のまゝに照らすなり
 はらいて真如の月をみよ
 昔のまゝに積るなり
 深き教の奥をとへ

善 悪 (同曲)

ありとあらゆる物事は
 悪に殃わざわひともなふは
 ありとあらゆる物事は
 善に幸ともなふは
 おのが心の姿なり
 我身に影の添ふ如し
 おのが心の姿なり
 車に従ふ輪の如し

〔注7〕慈覚大師円仁（七九四～八六四）は、平

安前期の天台宗の高僧。八〇二年に故郷・下野国の大慈寺で出家、のち比叡山にのぼり最澄の直弟子となり、天台止観の法を学ぶ。一時、故郷に帰ったが、再び比叡山の横川中堂で山籠りし天台僧としての基礎を作った。折から盛んとなった空海の真言密教に天台宗が押されるや、一宗の希望をう

けて四十二歳で入唐、天台密教の奥義をきわめた。留学十年で帰国、天台座主となり、天台の密教化をはかって真言密教に対抗、また修行に念仏を取り入れて比叡山浄土教を創始した。最澄につぐ比叡山仏教の大成者で、没後、最澄の伝教大師号と同時に慈覚の大師号を贈られた。

『江戸物語』

細田 隆 善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付：名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話（〇三）二六九―一二九三 二六七―六六三七
振替（東京）七―一〇九三／〒一六二

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由 (生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)

一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度

一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十五巻 七月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 六月二十五日 印刷

平成元年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一―一七三二四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。